

日本語力の涵養は、治療の質、患者とのコミュニケーションの質を高めるために、必要不可欠

大阪河崎リハビリテーション大学 作業療法学専攻講師 平本憲二氏



本学は、大学という高等教育機関であると同時に、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士というリハビリテーション専門家を育成する養成機関でもあります。学生は大学で、医学的な知識や技術を学ぶだけではなく、病院や福祉施設に行き、臨床実習を行います。その際、クライエントの評価や治療で、記録や報告を書く必要に迫られます。

そこで、本学では、学生の日本語力向上を目指した様々な授業が各教員の工夫のもと、実践されています。まず、一般的な授業科目として、日本語表現という授業が設けられています。「表現」はそれを受け止める相手があつて初めて成立するものだという考え方のもと、「話す」、「書く」という能動的能力に加えて、「聞く」、「読む」という受動的能力を養うトレーニングが行われています。

また、本学では、入学したばかりの一年生を対象とする「基礎ゼミ」という授業があります。ここでは大学の全教員が少人数の学生を担当し、各の裁量で学生のニーズに合わせた課題を設定していきます。その中で、日本語検定公式練習問題集3級（高校卒業レベル）をテキストにした取り組みを行いました。担当教員の熱心な指導を受けた学生たちは、全員が試験に合格したことで、自信を持って、調査や報告、記録といったレポート作成に臨むようになりました。

その報告を受け、私が担当する2年生作業療法学専攻の学年ホームルームでも、同じ日本語検定のテキストを用いて学習を行うことになりました。検定試験に合格することを目標に学習すると、学習意欲が高まり良いのですが、テキストにも示されていますように、合格後も反復し確認する学習が重要と考えています。なぜなら、彼らのゴールは検定試験に合格することにではなく、質の高い医療を実現することにあるからです。

日本語力の涵養は、治療の質、患者とのコミュニケーションの質を高めるために、必要不可欠であると考えられます。学生には、言葉の意味を知り、正しい言葉を使用して、適切な文章を作成すること、話し方（伝え方）を取得することなど、その一つ一つを丁寧に扱い、適切に表現する力を養い続けてほしいと考えています。